

南シナ海の 4 艘の “不沈空母” の生存性

漢和防務評論 20160801 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国が南シナ海を埋め立てる真のねらいは何か？漢和防務評論は、対台湾作戦が主目的であると述べています。

埋め立て工事は国内企業によって行われる大規模土木工事です。鈍化した中国の経済成長を支えるためにも止められない工事であり、経済面だけでなく軍事的にも必要な、一石二鳥を狙った工事ともいえるでしょう。

本誌編集部

2015 年、中国は空前のスピードで南シナ海を埋め立て、軍事基地を建設した。その中に 4 個の大型軍用飛行場が含まれ、各飛行場の滑走路長は 2700 ないし 3000 メートルに達する。4 個の島礁に建設された 4 個の飛行場は正真正銘の “不沈空母” といえる。永興島の埋め立て、同島への HQ-9 型地对空ミサイルの配備、J-11 戦闘機、KJ シリーズ早期警戒機、Y-8 シリーズの哨戒機の進出等の動向から見ると、このような前進配備軍事施設はさらに南方へと拡大展開されると思われる。現在埋め立て中の 7 つの島礁にも今後同様の軍事施設が建設される可能性がある。

4 個の島礁が 3000 メートルに近い滑走路を有するということは、4 個の “不沈空母” は、超大型空母に匹敵することを意味し、大型輸送機、H-6K 戦略爆撃機も離着陸できる。4 個の飛行場の周辺に注目すると、エプロンの面積が相当広く、さらに拡大される可能性がある。戦時には、各飛行場に 1 個航空旅団程度が進出してくる可能性が極めて高い。中国空軍は、師団を旅団に改編した後、J-10 の 1 個飛行団は、定数が 28 機から 30 機に増加した。J-11 の 1 個戦闘機団の標準定数は 24 機であり、今後増加するのであろうか？

中国は、わずかこの 4 年間に、南シナ海で大規模な建設を行った。その目的は何か？

KDR の分析その一：当然、有効に管制できる防空識別圏 (ADIZ) を設定するためであり、各種の飛行支援が必要になるためである。そのほか水上艦の迅速な増援も必要になる。その二：南シナ海の水上新路を有効に支配し、ASEAN の国々がこれ以上島礁を占拠するのを防止するためである。しかしこの目的のためだ

けならば、このような大規模土木工事が必要であろうか？南シナ海周辺国家は、みな強力な海上、航空戦力は保有していない。シンガポールは比較的強力だが。しかし海上で中国との主権の衝突はない。“占領された島礁”を周辺国家から奪回するつもりであろうか？

以上のことから、中国が南シナ海に 4 大“不沈空母”を建設する真の動機、目的についてさらに検討しなければならない。

第一の問題は：中国の聯合参謀部には、特に南シナ海に関して、長年にわたって如何なる作戦計画も存在しなかったのだろうか？本誌は、聯合参謀部が作成した南シナ海作戦計画などは当然知りえない。これは最高機密に属するからだ。KDR は、無用なかつ不法な手段は採らない。しかし本誌は、1990 年代以降、中国軍の戦略学者の著した専門書籍や院校の学報等々を長年閲読していた。不思議なことにこれらの内部資料が西側の若干の華人書店で売られていたのである。KDR はすでに詳細を説明した。今でも領収書を保管している。

これらの内部文書を詳細に閲読し、中国軍の各種“軍事闘争準備計画”を分析すると、聯合参謀部の将校たちが如何なる作戦計画を考えているか推測できるはずである。特に南シナ海においては。

1994 年から、軍内の刊行物に初めて“軍事闘争準備”の用語が出現した。しかも多くの相当具体的な作戦計画案が記述されていた。これを作戦計画と想定するならば、様式および記述方式は真の作戦計画と同じのはずである。これは KDR の推測であるが、如何なる国家においても軍隊の作戦命令書は、独特の様式があるはずである。

しかし責任をもって言えることは、KDR は一度も“占領された南シナ海島礁の奪還”や“北朝鮮内乱への武力介入”“シベリアへの進攻”“中央アジアへの進攻”“日本本土、沖縄への攻撃”等々の作戦計画は閲読したことがない。単に 2 つの種類の“軍事闘争計画”が頻繁に出てきただけである。

第 1 類の計画は：“高寒山地反撃作戦”である。一般的な記述方法は：I 国は、我軍が島内独立勢力を攻撃するため上陸作戦を発動した際、局地戦争を発動し、我が国境に縦深的に侵入する。我が諸兵種は直ちに内線積極防御を実施する。その後、迅速に外線作戦に転じる、とある。

ここで説明を要することは：これらの作戦計画に類する内部資料においては、中国軍はインドとの係争地区に対して主動的な進攻や侵入を全く想定していな

いことである。中国の対インド政策は、外交部であろうと軍人であろうと、基本的に現状維持を承認しているように見える。中国はインドが現状を打破しようとしていることを憂慮しているようだ。

第 2 類の計画の数が最も多い。当然これは台湾関連の計画である。この類の計画は、文献全体の 95%を占めている。

その内容は：上陸作戦準備、戦役軍団の聯合編成、島嶼封鎖作戦準備、沿海部都市防御・対上陸・対空襲作戦準備、島嶼山地作戦準備、島嶼上陸作戦時の部隊運用法等々である。

それぞれの文献には、海上での水陸両用戦車の波状攻撃の際の各波間の距離、準備射撃の時間等々が詳細に記述されている。

第 3 類の計画は第 2 類の計画に関連する計画であり、全体の 60 ないし 70%を占めている。すなわち：島嶼上陸作戦時における強敵（米軍）の軍事介入に対抗する作戦である。

その内容は：第二砲兵による空母攻撃、沿海部の都市に対する強敵（米軍）の介入攻撃に対する準備、封鎖と反封鎖、三戦（法律戦、宣伝戦、心理戦）の原則等々である。

これらの文献の想定内容は、過去 20 年来、中国の軍事装備の改善、国際関係、兩岸関係の変化に従って大きく変化してきた。

例えば、1990 年代中期の内部文献が提議した“軍事闘争準備”においては、おおむね台湾軍が制空権、制海権を保有すると認定していた。当時の中国軍の上陸作戦は、劣勢装備条件下で行われると規定していた。KDR に最も大きな印象を与えたのは：“大縦深海上封鎖論”であった。すなわち、“台独勢力の資産を没収する方式”によって、すなわちエネルギー輸送手段を撃破することによって台独勢力の幻想を破壊する、としたことである。

その意図するところは：いったん開戦となれば、南シナ海で中国海軍が大縦深の遠距離海上封鎖を実施することが可能であり、台湾の石油輸送を止め、台独勢力を抹殺する政治目的を達成することができる、と。これは当然 KDR の解釈であるが、本誌はこれが正しいと信じている。これは中国の願いでもある。

これは中国軍内文献で頻繁に議論されており、南シナ海と対台湾作戦を連係させた最も重要なテーマとなっている。

さらに、“強敵（米軍）の軍事介入に対抗する軍事闘争準備”の一連の計画の中で、特に“戦区隔離”の重要性について論じている。元々の発想は、1995年の第一次ロシア・チェチェン戦争の経験から来ている。これは中国軍によって広く議論された。これらの文献では、特に強敵（米軍）空母の増援経路を分析した。増援経路には、南シナ海を北上、日本から南下、及び米本土から直接台湾海峡戦区に進入する経路が含まれる。實際上、1996年の台湾海峡衝突では2艘の空母のうち1艘は、南シナ海を経由して台湾近海に進入している。

以上の“軍事闘争準備”を理解すると、中国がなぜ南シナ海に4個の“不沈空母”を建設する真の動機が解る。それは、“対台湾軍事闘争準備、大縦深海上封鎖、戦区隔離、強敵（米軍）空母の介入阻止のためである。周辺の弱小国家に対抗するためだけならば、このような大げさな軍事基地建設は必要がない。

したがって南シナ海の“不沈空母建設”は、当然その他諸々の目的はあるが、第一の目的は、中国の“対台湾軍事闘争準備”であるとKDRは考えている。

中国軍の軍事的動機は以下のとおりである：

対潜哨戒機、ヘリ、島礁ソナー、長距離レーダー、電子戦用監視設備、及び地対空ミサイルが4個の“不沈空母”上に配備される。各島礁の総合作戦能力は、米軍の1個空母艦隊に負けない。一旦開戦となれば、中国は必ず南シナ海に軍事的な航行禁止区域を設け、第三国の軍用船舶が南シナ海を通過して台湾海峡に向かうのを阻止するであろう。

さらに4つの“不沈空母”が台湾商船を攻撃するのは当然容易である。この4大島礁には港が建設されている。岸壁の長さは400から150メートルと様々だが、現在の中国海軍が保有するすべての水上艦、潜水艦、ミサイル高速艇が停泊するには十分である。

このような大規模埋め立ての結果、中国海軍は、日米及び東南アジア国の潜水艦活動を探知するため、すでに“不沈空母”周辺に水中ソナーを敷設しているのではないかとKDRは考えている。もしそうならば、中国は南シナ海の水面下の対潜能力を大々的に強化することを意味する。

しかし、様々なからくりを使ったところで、南シナ海で米中が戦うことになった場合、軍事摩擦がどの程度のものであらうと、4大“不沈空母”の生存能力は空母に比べれば脆弱である。

その理由は：

A. 4 大 “不沈空母” の位置は固定されており機動できない。

B. 面積が小さすぎて、軍事部署、戦闘機、地对空ミサイル、弾薬庫は地下化が図れない。したがって永興島の地下化工事は浅いはずである。しかも過分に集中している。B-2 爆撃機は容易にこれら目標を破壊できる。F-35A 及び F-18E 艦載機は射程 300 KM 以上のスタンドオフ兵器を上述目標に投射することができる。

結論：もし米中間で開戦となれば、4 大 “不沈空母” の生存性は相当低い。

以上